

センター第四期の研究評価について

非文字資料研究センター
センター長
小 熊 誠
OGUMA Makoto

非文字資料研究センターは、2008年に成立してすでに12年が経過した。本センターの研究員も多くが入れ替わり、研究の内容も変革期を迎えていると思える。第四期は、2017～2019年度の3年間であり、この期間の研究内容について紹介する。

前センター長の内田青蔵先生の研究評価を受けて、基幹事業と研究事業に分けて述べる。

○基幹事業

- ・非文字資料研究ネットワーク形成
- ・若手研究者の育成
- ・情報発信

○研究事業

1. 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究
2. 絵画・版画・写真に見られる19世紀ヨーロッパの都市生活
3. 第二期『東アジア生活絵引（中国江南編）』編纂のための基礎作業
4. 日本近世生活絵引—琉球人行列と江戸—
5. 東アジア開港場（租界・居留地）における日本人の諸活動と産業
6. 近代沖縄における祭祀再編と神社
7. 中世景観復元学の試み—北九州市若松区の惣牟田集落を事例として—
8. 非文字資料研究のコミュニティにおける知識とサービスの効率的な検索と安全安心な流通研究
9. 戦時下日本の大衆メディア研究

まず、海外との非文字資料研究ネットワーク形成としては、提携機関との交流がある。今期は、2017年10月に上海社会科学院歴史研究所、2018年1月に仁川大学校中国学術院と神奈川大学で交流協定が結ばれ、提携機関が11機関になった。前者との協定締結に合わせて、公開研究会「上海租界と外国人社会について」が開催された。後者に合わせて、横浜キャンパス3号館1階の展示コーナーで「仁川チャイナタウン写真展」を開催した。さらに、公開研究会で「日・韓の華僑と近代史—仁川、横浜、神戸の華僑」を開催した。公開研究会には学内だけでなく学外の参加者も多く、交流協定、公開研究会、写真展示会が同時に開催され、本センターのネットワーク形成がさらに発展したと言える。

これらの協定締結に呼応し、本センターから上海及び仁川を訪問した。2018年11月に上海社会科学院歴史研究所と本センターが共催して、「円卓会議—中国・上海都市研究の新動向—」が上海で開催された。2019年2月26日から3月1日にかけて、韓国の漢陽大学校東アジア文化研究所と仁川大学校中国学院を、本センターの研究者と職員6名で訪問した。仁川では中華街も訪問し、華僑協会や仁川市立図書館で華僑関係の資料を見ることができた。本センターの複数の研究班メンバーと一緒に海外協定校を訪問するのはこれが初めてだと思われるが、非文字資料研究のネットワークを広げるためにも、今後このような活動を継続していく必要がある。

若手研究者の育成については、三つの活動が行われてきた。第一は海外提携研究機関から若手研究者を招聘する活動で、第四期も毎年度5名から7名を受け入れた。第二は海外提携研究機関へ本学の博士課程後期の院生を派遣する活動で、毎年度1名あるいは2名派遣した。第三は、奨励研究制度で、21世紀COEプログラム時代から継続しており、世界に通用する若手研究者育成のため、研究費の支援を学内公募によって行うものである。毎年度5名程度の博士課程前期・後期の院生が採択された。この三つの若手研究者に対する活動は、その活動終了後に義務として報告書を提出する。それをまとめて、2017年度から毎年度『非文字資料研究に飛び立つ 海外招聘・派遣事業報告集』として刊行することとなった。この報告書を読むと、本センターの若手育成は、十分成果をあげていることが分かる。

情報発信は、数多くの公開研究会、研究会で行われているが、今期は特にセンター開設10周年を記念して、2019年2月16日にシンポジウムを開催した。テーマは「非文字資料研究の過去・現在・未来」として、まず元センター長の田上繁先生が「センターの開設と非文字資料研究の可能性」と題して講演を行った。第1部は各研究班の報告、第2部では黒田日出男東京大学名誉教授と福田アジオ元センター長の記念講演、第3部は「未来に向けて」というタイトルで非文字資料研究の今後の方向についてディスカッションを行った。非文字資料研究の可能性について、多くの意見が出された。

次に、本センターの主要な研究活動である研究班は今期9班あり、それぞれ研究会や公開研究会を開催して、研究の成果を積極的に公開した。

第1班は、『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を英語、中国語、韓国語に翻訳しているが、今期は第4巻の本文篇（英語）を出版した。第2班は、ヨーロッパでの実地調査を行い、その成果を『非文字資料研究』などに掲載した。第3班は、20世紀初頭の上海にて発行されたグラフ誌である『凶画日報』に掲載された「営業写真」の検討を通して、当時の上海の生活や風俗を読み解く目的で、「営業写真」のデータベース化を行った。第4班は、鹿児島大学附属図書館蔵の「琉球人行粧之図」・「琉球人往来筋脈之図」に描かれた琉球使節の行列の様子と江戸の町並みなどを絵引の作業を通じて分析、研究した。その研究成果として、『日本近世生活絵引 琉球人行列と江戸編』を刊行した。第5班は積極的に研究会および公開研究会を開催している。2017年度は7回、2018年度は5回、2019年度は3回であった。研究成果として、2020年3月に『東アジアにおける租界研究—その成立と展開』（東方書店）を大里浩秋・内田青蔵・孫安石編で非文字資料研究叢書3として公刊した。第6班も研究会および公開研究会を4度開催し、『『帝国日本』の残影、海外神社跡地写真展』の展示会を横浜市民ギャラリーで開催した。この写真展に使われた写真も含めて、非文字資料研究叢書2

として『「神国」の残影—海外神社跡地写真記録』（国書刊行会）が、稲宮康人・中島三千男著で刊行された。第7班は、北九州市若松区惣牟田集落の中世景観を調査しており、のべ31回の現地調査を行っている。第8班は、非文字資料を研究者間および一般ユーザーと知識、サービス、資料をやり取りするためにゲーム理論によりモデル化を行うとともに、ブロックチェーンの技術を用いて安全安心な価値交換を行うシステムを構築する研究を行った。第9班は、紙芝居に関して京都、滋賀、愛知、長野、姫路、高松、徳島、所沢、北海道、群馬など全国にわたって調査を行った。特筆すべきは、2018年2月に非文字資料研究叢書1として『国策紙芝居からみる日本の戦争』が勉誠出版から安田常雄編著で出版されたことである。この本の評価は高く、第42回日本児童文学学会特別賞を受賞し、「国策紙芝居」の全体像を明らかにしたとともに戦時下の紙芝居政策の背景や子供たちの享受の状況を研究した点が高く評価された。さらに第3回堀尾青史賞を受賞し、紙芝居が戦時下で果たしたメディアとしての実態を本格的に明らかにした点が評価された。

以上、各研究班の研究成果は高く、今後も非文字資料研究が発展することを期待している。